



日本植物病理学会ニュース 第60号

(2012年11月)

【会員の動静】

1. 人事

都道府県試験研究機関関係

田中弘太 H24. 4 静岡県病害虫防除所

2. 学位取得者（課程博士・論文博士）

陸 遥 H24. 3 静岡大学 博士（学術） Analysis of the role of KdGf for pathogenicity in *Xanthomonas oryzae* pv. *oryzae*

【受章のお知らせ】

佐古宣道氏が平成24年春の叙勲において瑞宝中綬章を受章されました。瑞宝章は、公務等に長年従事し功労を積み重ね、国または公共に対して功績のあった者に国が授与する章です。佐古宣道氏は、「ポテトウイルスのアブラムシ非永続伝搬機構の解明とその血清学的研究」で平成6年に日本植物病理学会賞を受賞されるとともに、当学会の評議員や編集委員、九州部会長など、また佐賀大学の農学部長や学長、佐賀県農業大学校長などを務められ、当学会の発展、農学の研究や教育に多大な貢献をされました。

(高橋賢司)

【談話会・研究会活動報告】

EBC 研究会活動報告

平成24年9月11日12:30～17:30、8回目となるEBC (Evidence-based Control) 研究会ワークショップ2012が、JA全農営農・技術センター大ホール（神奈川県平塚市東八幡）で開催され、全国から病害虫防除に深い関心を抱く約80名が参加した。川口章氏（岡山県農林水産総合センター農業研究所）から「On-farm researchの意義とその手法について」と題して講演が行われ、その方法論や解析法について、コホート研究やメタアナリシスの事例が紹介された。ばらついた複数のデータを統計的に統合して一つの結論を導く解析方法としてメタアナリシスは非常に有効

で、具体的な表現による現場の農業者へのわかり易い説明が可能となる。次に、「メタアナリシスと箱ひげ図の解説と使用方法について」と題して、岩館康哉氏（岩手県農業研究センター）による講演が行われた。これまでの参加者からの強い要望により「メタアナリシス」と「箱ひげ図」について、解析に用いる試験成績の準備から統計解析ソフトを用いた解析および結果の出力についての作業工程が、リアルタイムのパソコン操作とともに説明された。井手洋一氏（佐賀県農業技術防除センター）からは「農薬混用時の防除効果の変動は？—果樹類での事例をもとにした見解—」と題して講演があり、混用による効果の向上および低下について、これまでに得られた試験結果を解析し、主にカンキツ、ブドウおよびナシについて具体的な事例が示された。休憩をはさんで、「現場で役立つ防除技術とその実践」と題して川幡寛氏（JA全農営農・技術センター農薬研究室）の講演があり、安定した防除効果を得るための防除技術の特性とその効果的な実践方法について解説が行われた。講演に続き、会場外で㈱丸山製作所と㈱やまびこからの提供を受け、宗和弘氏（JA全農営農販売企画部）の解説とともに、ドリフトレスノズル、微粒剤F散布機、セット動噴、スピードスプレーヤ等の最新の防除機が紹介され、農薬の暴露低減、省力性、ドリフト低減等の具体的な方策が実演された。いずれの講演に対しても活発な質疑応答があり、新たな試みであった防除機の実演では、最新機種のパフォーマンスには参加者一同に感嘆の声があがった。今回、JA全農に多大なご協力をいただいたことを改めて大いに感謝するとともに、この盛況と熱気が来年もまた継続することを期待して、大いに懇親を深めた後に散会した。（富田恭範）

【関連国際会議開催状況】

2012年度アメリカ植物病理学会大会報告

アメリカ植物病理学会（APS）大会は昨年、ハワイ州ホノルルで国際植物保護会議（IPPC）と合同で開催されたが、本年度は8月4～8日の5日間に亘ってロードアイラン

ド州プロビデンスのコンベンションセンターで開催された。4日はフィールドトリップやワークショップ、APSの各種委員会、5日は総会、表彰式が行われ、20のスペシャルセッション、30のテクニカルセッションが会期末日まで行われた。ポスター発表は5日に掲示し、7日に各自1時間のコアタイムが与えられ、活発な質疑応答が行われた。

ポスター発表は600余題の登録があり、実際に掲示された数はそれよりやや少ないが、概ね掲示されていたようであった。参加者はもちろんアメリカ在住の研究者が多いが、カナダ、ヨーロッパ、中国からの参加者も目立った。日本からの事前登録参加者(全てポスター発表者)は4名であったが、本大会の直前に京都でInternational Congress on Molecular Plant-Microbe Interactionが開催されており、特に感染生理関係の研究者はそちらで発表されていたように推察される。本大会全体の発表演題は、新病害60題強、化学防除40題程度、殺菌剤耐性菌20題程度、生物防除40題程度、IPM(発生予察を含む)40題程度、生態・疫学・リスク評価80題程度、分類・進化110題程度、宿主抵抗性・感染生理50題程度であった。ポスターは広い会場にバランス良く配置されており、様々な分野の発表をじっくり閲覧することができた。また、ポスター発表のコアタイムになると、発表者がきちんと自身のポスターの前に立ち、訪れた質問者と熱心な質疑応答を行っていたことが印象的であった。ちなみにAPSでは、植物病理学でもIPMという言葉が一般的で、化学防除以外の防除技術またはそれらを組み合わせた防除の研究、発生予察に基づく防除などは全てIPMとして扱われることが多いようであった。

報告者である私自身はポスター発表を行ったが、アメリカだけでなくカナダや中国の研究者も質問にやって来て、意見交換を行った。質問者の中には、私の論文を事前に読んでから来てくれた人や、この分野における世界的権威と言える研究者とも質疑応答を通じて交流を持つことができたことは、今後の自分の貴重な財産になったと思う。

活発な質疑応答の場面や、会場のロビーでのディスカッションを耳にしている気づいたのは、会場でよく耳にする単語が「hypothesis」だということ。この研究における仮説はなんだ?という質問が多く、分野を問わず、自分のポスター発表でもそういう質問を受けた。原因と結果の関係を明らかにするという科学の本質を皆がよく知っているからこそ、「仮説を検証する」というアプローチがアメリカの研究者には根付いているのだらうと感じた。また、実用化を見据えた農業技術開発型研究、または農家の圃場での調査や介入試験などの現地型研究の内容もあり、その内容は私の所属する公設試験研究機関が行う試験研究と共通す

るものであった。そういった研究を行っている機関も特に偏っているわけではなく、アメリカ農務省の試験研究機関(USDA ARS)や大学、州立農業試験場と多様であった。それら研究のアウトプットは農業生産現場への還元であると同時に、論文発表も視野に入れ、試験設計やデータ解析は入念に行っているという印象で、自分自身大いに刺激を受けた。

今回の大会の講演要旨は事前にPDFで発信されており、自分で印刷して持参しないといけないのだが、昨年の大会から導入されたスマートフォンやタブレットPC用アプリがこの大会でも無料で提供され、プログラムや要旨が全てこれらのモバイルデバイス上で閲覧でき、聴きたい発表を自分のスケジュール管理できるようになっていた。私も自分のスマートフォンでそのアプリの恩恵を受け、効率的に会場を回ることができた。今後、大規模な学会会議ではこういった取り組みが順次導入されていくのかもしれないと思う、大変興味深かった。(川口 章)

【病害虫研究会開催予定】

第85回九州病害虫研究会研究発表会(春季大会)

日時:平成25年(2013年)2月5日(火)9:00~

場所:KKRホテル熊本

(〒860-0001 熊本市中央区千葉城町3-31)

TEL 096-355-0121

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いします。

投稿宛先:〒114-00185 東京都北区中里2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX: 03-5980-0282

または下記学会ニュース編集委員へ:

高橋賢司、濱本 宏、根岸寛光、植草秀敏、宮田伸一
各委員宛

編集後記

学会ニュース第 60 号をお届けします。

本号は、研究会活動と国際会議参加の報告を中心に掲載させていただきました。

談話会、研究会、部会はいずれも順調に開催されています。そのなかで EBC 研究会の報告を掲載しました。病虫害防除について活発な論議が行われています。また、アメリカ植物病理学会への参加報告を掲載しました。国際的な場での情報交換や交流が今後益々活発に行われることが期待されます。

各地域で来年開催されます病虫害研究会等の開催の案内を掲載しました。奮ってご参加いただきますようお願いいたします。

受賞のお知らせです。佐古勇氏が瑞宝中綬章を受賞されました。誠におめでとうございます。昨年度の稲葉忠興氏の受賞に続く喜ばしい話題です。

この学会ニュースは、学会内の有益な情報交換の身近な場としてご活用していただきたいと思いますので、皆様からのご投稿をお待ちしています。
(高橋賢司)
